



## 先輩寄稿

### モノづくりと音楽の素敵な関係

川竹道夫（昭和四十二年卒）

ギタリスト、有限会社エミール・ソフト開発取締役会長

#### プロローグ

人間を定義する言葉に、ホモサピエンス（知識人）、ホモファーパール（工人）、ホモルーデンス（遊戯人）と三つがあるが、私自身を振り返ってみると、まさにホモファーパールとしてモノづくりに生き、ホモルーデンスとして音楽に遊んだ72年間ではなかっただろうか。思い返せば、たくさんのものを壊したり、作ったりしてきたが、本質的には子供の頃と同じことをずっと続けているようだ。しかしながら少年時代の自分の作ったものを振り返ると感心する。ありあわせの材料でろくな工具も持っていないのにどうやって作ったのだろう。今は工房と工具を揃えていても、あの頃のように情熱を注いでモノを作ることはできない、途中で投げ出すことも多くなった。

模型やラジオ作りに情熱を燃やした少年時代、そして音楽や楽器作りに遊んだ青春時代を振り返ってみたいと思う。

#### 模型飛行機とラジオ作り

小学校時代にのめり込んだ最初のモノづくりは文房具屋さんの軒先につるされていた袋入りのキット「A級ライトプレーン」に始まった。読めない漢字もあったが、設計図を見ながら作り、完成後外に出て飛ばそうとしたら折からの強風、手に持った飛行機の主翼がバツタンと折りたたまれてしまった、ゴムも巻かないうちに……。原因は竹ひごをつなぐニューム管（アルミのパイプ）に竹ひごを差し込むときに細く削り過ぎ、さらにペンチでしっかりと啞えた為に、潰れてしまったらしい。泣く泣くニューム管と翼に貼る飛行機紙を買いに走り自分で修理した。

翼は短くなったものの、飛行機の形はしていた。今度は風もないし絶好の天候だったのに、あまりうまく飛ばなかった。それでも10メートルくらいは飛んで墜落した時は「飛んだ!」と心のなかでつぶやいた。

この飛行機は後日、主翼、尾翼を作り直し念入りな滑空テストの後、少しだけゴムを巻き、そっと前に押し出すと静かな向かい風を受けて機体は上昇し、庭の周りを一周して着地した。誰も見ていなかったので夕食前の家に駆け込み、「母ちゃん、見て!」、家族皆が駆けつけてくれた。有頂天の私はゴムを一杯に巻き、上に向かって飛ばした。ぐんぐん上昇し上空を舞いながら屋根の上を通り越して隣の工場に隠れてしまった。

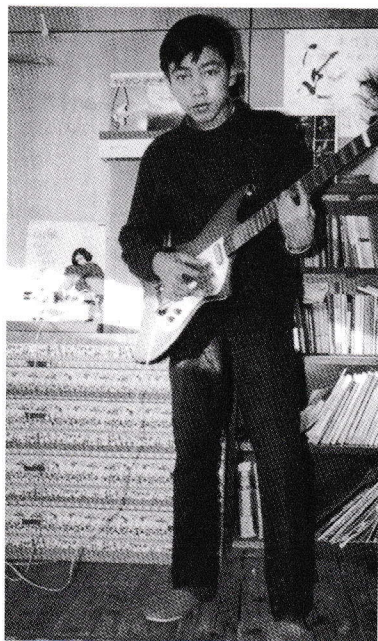
飛行機づくりのめり込んだ私は、ほぼ毎日飛行機を作っていた。ある日曜日、母校の加茂名中学校の校庭で飛行機大会が開催された。主催者はクリッパ―商会のおじさんだった。加茂名中学校は現在も同じ位置にあり、西部公園の前なので、上昇気流が発生する。うまく上昇気流に乗せると飛行機はゴム動力がなくなった後も滑空しながらどんと東の上空に上昇し、最後には眉山の向こうに隠れてしまう。これを通称「眉山越え」と呼んでいた。競技は、手を離れてから着地するまでの対空時間を競うものだが、気流に乗った場合はゴム動力が切れても上昇して見えなくなるので、8倍の望遠鏡で覗いて見えなくなるまでの時間を測るといふ規則であったようだ。私の作った飛行機が眉山越えをすることはなかったが、上昇気流に巻き込まれて見えなくなった飛行機が一位(一番飛んだ)という評価になるのは納得がいかなかった。私の飛行機は小学生の部で2位

を頂いた。

小学5年生頃には電気工作に目覚め、ゼンマイ、ゴム動力からモーターに変わり、鉱石ラジオに目覚めたのもこの頃だ。電気と電波にのめり込んだ私は家にある電気製品を何でも分解。壊れた真空管ラジオが一台あれば、何か月も遊べた。中学時代は鉄道模型(HOゲージ)やアマチュア無線の真似事もした。当時の中学生ではよほど恵まれた家庭でないと、本物のアマチュア無線に興じるに十分なお小遣いなどもらえなかったからだ。

### 城南高校時代

城南高校に入ると事情は一変した。物理部にはアマチュア無線のアンテナが立っていたし、同級生にはアマチュア無線の免



許とコールサインを取得している者がいて、しかもその彼はギターが弾けて、スポーツ万能といった具合だった。同じ徳島市内とはいえ加茂名中学とは別世界のような気がした。飛行機はUコンとなり、エンジンを搭載したものがまぶしかったが、高校生で買えるものではなかった。ラジオやアンプを作っては壊し、改良するつもりでまた壊してしまう。こんな繰り返しだったように思う。

高校3年ともなると受験勉強まつただ中。2年の頃にはよく遊んでくれた友達も3年の頃にはあまり相手にしてくれなくなった。A君が学校にギターを隠し持って来て、校舎の屋上で弾いていたのを聴いて、自分も弾けるようになりたいなあ、と思った。小中学校からの友人でもあったB君の家に遊びに行った時、楽譜を見ながら当時の歌謡曲を次々と弾いてくれたのには驚いた。みんないつの間にかギターの勉強をしたのだろうか？

ベンチャーズの「パイプライン」の衝撃は忘れられない。いきなり「歌のない音楽」が聞こえてきたからだ。アメリカンヒットパレードに、ヴォーカル抜きで登場したのは、この時のベンチャーズが初めてだったのではないだろうか？

エレキギターを見て、欲しくなったが買えるはずも無く、結局自分で作ってしまった。学校帰りに東新町商店街の楽器屋に立ち寄り、展示してあるエレキギターのサイズを物差しで測って手帳に書き込んでゆく。トレモロアームはこうもり傘の柄と蝶番でつくり、ピックアップは古いトランスを分解して取り出したエナメル線を巻いて自作。もちろんアンプやスピーカーも自作。チューニング方法も知らないのに、ベンチャーズやスプー

トニクスの曲を弾いていた。

### 大学でギターを始める

こうして出来た自作のエレキギターを持って大学のギタークラブに入部したのだが、先輩たちに一笑に付されてしまった。ギタークラブにはエレキはないと言われ、しかたなくクラシックギターの世界へ。ところが、クラシックギターを始めたところ熱中してしまい、いつの間にかクラブで一番うまくなつてしまい、先輩たちにおだてられて、プロのギタリストになる事を決意。折しも大学は紛争中で封鎖状態、勉強半ばにして上京し某音楽学院に入学。日本中の凄腕のギタリストが集まっていると思いきや、教授や仲間からほめそやされ、ギターコンクールに何度も挑戦したが、最高で4位。日本一には縁がなかった。

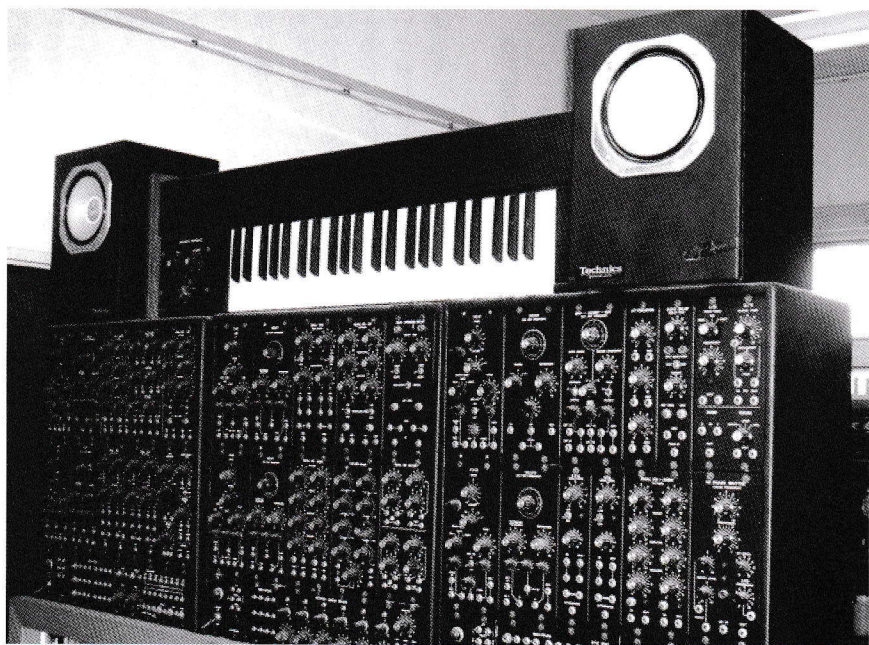
卒業してオーケストラの仕事などもしながら生活していた頃、母校から講師の仕事の話が有り、25才にしてギターの指導を始めた。この頃音楽学校で同級生だった現在の妻と結婚。横浜は伊勢佐木町に住まい、横浜から東京、千葉に通う毎日。乗り換え駅は「秋葉原」、これ幸いと途中下車してジャンク屋めぐりを欠かさなかった。その頃の興味の中心は、もっぱら軍用無線機や真空管。TTLのデジタルICがやつとアマチュアの手に入るようになった頃だ。すでに時代遅れとなっていた真空管で無線機を作り、念願のコールサインをもらって無線局の開局。マンションの1室から微弱な電波で、モールス信号を送る楽しみに興じていた。夜は築地の高級レストランでギターを

演奏したり、ポルノ映画の音楽を担当した事もあった。濡れ場の画面を見ながら演奏するのだが、撮影所内の食道で、先ほどまで試写室の画面で喘いでいた当の有名ポルノ女優がラーメンをすすっている姿は、ワクワクしながらも哀れを誘った。

### シンセサイザーからコンピュータへ

さて、12年間の県外生活を終え、徳島に帰りエミール音楽院を開校してギターの指導を始めたが、時間はあつたし、ラジオ少年だったこともあつて、当時流行ったYMOや喜多郎、富田勲などのシンセサイザー音楽に傾倒。富田勲の使っているシンセサイザー「モーグⅢ」は一千万円もするらしい。なせばなる！の一心でモーグⅢのレブリカ製作を決意。ハンダ付けはお手の物だったとはいえ、回路設計など勉強しなければならぬ事は山ほどあつた。朝から晩まで実験の繰り返し。3年がかりでなんとか完成！

シンセサイザーが完成しても当時はそれを制御するデジタル・シーケンサーというものは庶民の買えるものではなかった。中身はコンピュータで出来ているらしいと聴くや、当時やつと一般の人が買えるようになったマイコンを購入。マイコンにのめり込んでしまった私は、写りの悪いディスプレイ（家庭用テレビ）にかじりついていたおかげで、下痢と脱水症状で救急病院に運ばれるしまつ。そのかいあつてか、手製のモーグⅢとマイコンを使ってコンサートも開くことが出来た。喜多朗、YMOなどの曲を演奏して楽しんでた。当時はコンピュータで音



楽が演奏出来るなんて思っている人は少なかった。こうしたYMOゴッコもやがて飽きてきた、というより倍音成分の多い当時のアナログシンセサイザーの音に過敏になり、電子音を聴くと目まいがするようになった。

以後、電子音からは遠ざかり、ひたすら生音を求めるようになるのだが、この時にのめり込んだコンピュータの世界は私の生活基盤を大きく変える事になった。趣味で作ったソフトウェアが仲間たちに気に入られ、いつのまにか全国400名を超す会員組織を運営する事に。やがてある会社から自作のソフトが販売されたりすると、「こんなもので飯が食えるのか?」と思ひ、有限会社エミール・ソフト開発を設立。開発した製品は、音声合成装置、ROMライターなどマニアックなものからゴルフ・シミュレータまで何でも。AT自動車自動診断装置は、発明工夫点で徳島市長賞を頂いた。世の中の流れとともに開発の中心はデータベースからWebへ。ハードウェアの仕事から純粋なソフトウェアにシフト。デスクワークばかりになり、音楽も文章も絵も写真も映画も何もかもパソコンの前で済ませてしまうようになってしまった。

### 民族楽器から楽器づくりへ

さて、自然な音は素朴な音楽にある。民族音楽に目覚めた私は、ひたすら楽器収集を始めた。インターネットという言葉が大学だけでなく、一般の人の耳にも入りだした頃である。おかげで世界中の楽器の設計図を手に入れて、手当たり次第に製作

に挑戦。ギター、ヴァイオリン、ダルシマー、その他数々の民族楽器を製作し演奏する楽団「近世雑楽団エストラーダ」を結成し、ギター一辺倒だった私の音楽活動は次第に変化を見せ始めた。

この頃ギター仲間たちとギター製作を思い立ち、自宅の工房を開放して、みんなで製作に挑戦。これがNHKの全国放送や民放の特集番組などで紹介され、いつのまにか徳島のギター製作技術は日本一、の折り紙をもらうようになった。同時にギターの生徒を全国レベルのコンクールに出すようになったところ、あつという間に日本一が4人も育ってしまった。ギター演奏で4名が、製作で一名が日本一に輝いた。徳島の文化レベルは低いと言われるが、そんな事は無い、日本一レベルである事が証明出来た。

### 井戸掘りも趣味に

コンピュータや楽器作りに没頭している間も、庭にビオトープを作り、蛭が飛び交う環境が欲しいとの思いがあった。蛭の成長には水が必要。きれいな水の確保は井戸しかない。幸い我が家近くの蔵本駅前には「蔵清水」なる名水が評判を呼んでいる。我が家の庭にいい水が出ないはずはない、と千葉県に伝わる伝統的な手法「上総掘り」を手本にひたすら手掘り。幾多の困難を乗り越えて最終的に11メートル掘った地下からは、鮎喰川の伏流水と思われる、澄み切った美味しい水がふんだんに湧きだした。感動の一瞬である。以後20年間、手掘りの井戸は冬

は暖かく夏は冷たく美味しい水を絶やす事が無い。

## エピソード

私はギタリスト、ギターの演奏と指導が生業で、モノづくりは趣味として、機械作りやAI技術の勉強を楽しんでいる。城南高校を卒業して54年、72才は高齢者とはいえ、人生100年時代と言われる今日、まだ時間はありそう。積み上げられた未完の作品を完成させることができるのだろうか。作りたいもの、遊びたいことはまだ他にも一杯ある。残された人生をいかに楽しく生きるかが問題だ。子供の頃から夢見てきたロボットづくりに挑戦してみたい。ひたすら続けてきたモノづくりと音楽、どちらも技術の衰えは仕方ないとして、あと20年くらいは現役で続けていきたいと思っている。

